P3-273 線維筋痛症における自己免疫疾患関連のデータの検討について

○小笠原　均，大道寺　英幸，河西　利昭

江東病院 リウマチ科

【目的】線維筋痛症と診断可能な126症例について、自己免疫疾患としての側面から、各種データの検討を行った。また、線維筋痛症状の診断基準を満たす症例のなかに他の自己免疫疾患と診断可能なものがあるかについて、検討した。

【方法】線維筋痛症様の疼痛を訴える126症例において、ESR, CRP, FDP, FDP-Dダイマー、TAT, ANA, 抗DNA抗体、抗RNP抗体、抗SS-A抗体、抗SS-B抗体の検査を施行した。また、画像検査としては、早期リウマチとの鑑別診断のため、Gd造影手MRIを施行した。

【結果】線維筋痛症と診断しうる126症例のうち、42症例(30.9%)において、FDP, FDP-Dダイマー、TAT等の一部について、上昇を認めた。これらの群においては、ステロイドの少量投与により、疼痛の改善傾向を認めたが、126症例中、16症例(12.7%)においては、Gd造影MRIにおいて、早期リウマチの所見を認めた。ANAについては、78症例 (61.9%)において陽性であった。また、84症例(66.6%)においては、シェーグレン症候群に矛盾しない口腔乾燥、眼球乾燥を認め、12症例(9.5%)において、抗SS-A抗体が陽性であった。

【結論】線維筋痛症の診断基準を満たす126症例のうち、16症例(12.7%)が早期リウマチであった。また、FDP,FDP,FDP-Dダイマーの一部が上昇している症例では、少量のステロイド投与により、疼痛が改善した。

また、61.9%にあたる78症例で、ANA陽性であり、9.5%にあたる12症例において、抗SS-A抗体を認めた。

利益相反：無